

閃光尿女

~わざとおしっこ短編集~

◆サンプル◆



サンプル 目次

・ 高校の時の先輩のお漏らしを思い出してオナニーする話……	3
・ 隣室に季節外れの打ち水お姉さんが越してきた話……	10
・ ウォーキング・アサーション・ウイメン……	22
・ きちがいハロウィンおもらしセックス……	25

高校の時の先輩のお漏らしを思い出してオナニーする話

大晦日、椎名結は一人、酔っていた。

今年は実家に帰るのを止めて、一人の時間を過ごす事に決めた。家族や親戚の面々とガヤガヤ騒ぐのも、一年の締めくくりとしては悪くない。しかし、この数日の結は、メンタルがホルモンバランスに翻弄されていた。なんともタイミングが悪い話だ。

要するに結は、むらむらして仕方がなかった。

結局、適当な理由を作り、土壇場で帰省をキャンセルしてしまったのだった。

実家に帰ると、結の自室でも自慰行為はできない。隣の部屋は両親の寝室になっていて、壁が薄いのは会話が筒抜けだった事からも分かっていった。

そわそわした気持ちを隠して、結は馴染みのバーで飲んでいた。アルコールを口にする、エッチな気分がブーストされてしまいがちだ。

結はそれをも愉しもうと考えて、ハイボールに口を付けていた。もしも今、ちよつといい感じの人に声を掛けられたら、付いていっちゃうかも、などと考えながら。

心地よい酩酊感で体が火照る。欲求不満が、一層募ってくる感覚がある。遠くの方で大人しくしていた生理現象も、ジワリ、ジワリとその存在を強調し始めていた。

酒には、尿意の高まりを早める作用があったし、結は頻尿だった。今、この店で飲んでいる間にも、何度もトイレに行っている。それに加え、結は初発尿意を感じるのが遅く、切迫感を覚えるまでが早かった。

アルコールが入っていると、出口をしっかりと締めているという自覚が薄くなる。

切迫感が始まると、数滴程度のお湿りを許してしまう事は、結にとっては日常茶飯事だった。

ダメだ。むらむらした気分を紛らせたい。

「マスター、ちよつと外で一服してきますね」

結は席を立ち、外の喫煙所に行く事をマスターに伝えた。

「どうぞごゆっくり」

「一本吸ったらすぐ戻ります」

結はそう言いながら、ハンガーに掛けておいたコートを着た。立ち上がった時に、自分がかなり酔っている事に気付かされた。体の重心が安定しないし、天井がゆっくりと回っている気さえるる。

それに、おしっこがかなり溜まっているのが分かった。座っている時に比べ、おしっここの重力が垂直にかかるからか、疼きがひどいときわ強くなった。

おしっこしたい。

「いいんですよ、急がなくても。外で酔いを覚ましてこられては？」

一瞬だけ目を合わせたマスターは、意味深な目配せをしてきた。結はその視線を受けて、艶然とした笑みを浮かべた。

「私、かなり酔っちゃってるみたいですね……」

「外にいますと、きつとスツキリすると思いますよ。そう、スツキリとね」

ウインクしながら、冗談めかした口調のマスター。

「あはは……そうですね。じゃあ、しばらく失礼します」

結はそう言い置いて、入口ドアを開けて外に出る。

外に出た途端、冷気がスカートの中に入ってくる。

「うう、寒！」

今夜は風が弱かったため、まだましではあったけれど、思わず出る眩きは止まらなかった。

それに尿意。

おしっこがすぐそこまで来ているのは店内ではしつかり知覚できていたが、冷たい空気に体がさらされると、しつかり出口を開いているのか、自信が持てなってくる。

結にはマスターには面と向かって告白していなかった秘密がある。時折喫煙すると言って、実はおしっこをして帰ってくるという行為を、過去に何度かやっていたのだ。

人の多い日は、路地裏で。

人がいない時を見計らって、見繕っておいた場所で。

下着を脱いで、しゃがんで放尿という、まどろっこしい方法は採らない。

立ち姿で着衣のまま、股間を温もりで濡らす。

本来はトイレではない場所を、自分だけの仮設トイレと見なす。そこでは下着を脱ぐ必要はなく、好きなだけおしっこしてもいい。それは背徳感を得るための、理にかなった行為だと結は思っていた。

トイレの個室内部での慎ましい放尿に比べ、開放感が違うし、半ば公然と出してしまふ悦びもある。フラストレーションの解消にもなる。

今歩いている道の真ん中は、今日の仮設トイレではない。

「まだ。まだ我慢だよ」

結は自分を励まし、なんとか波をやり過ぎす事ができた。気を取り直し、この店から数分歩いた先にある、周辺の飲食店

共用の喫煙所を目指した。

千鳥足になりそうなのを軌道修正しつつ、歩を進める。

まだ飲める、そう思っている、立つて歩き始めると泥酔一歩手前というのは、結にとってはありがちかもしれない。

強い尿意は寄せては返すものだ。出口をこじ開けてきてしまいそうな時は、立ち止まって膝を擦り合わせなければならなかった。大晦日の夜ともなると、さすがに休業している店が多く、普段と比べて人通りが圧倒的に少ない。

今の自分を人に見られると、どう取り繕った所で「おしつこしい人」という印象は覆りそうにないから、見られる可能性が低い事は喜ぶべきなのかもしれない。

しかし結は、尿意を人に悟られたと確信したときには、露出的な快感も得られると考えていたので、多少の物足りなさを感じた。何度目かの厳しい尿意をやり過ぎし、思わず空を見上げた。

今夜は、歓楽街にしては星が綺麗に見える。

冬は気温が下がり、空気中の水蒸気の量が減るため、澄んだ空気になるのだ。それに加えて、一等星が天空に多く瞬く季節だから、夜空が明るく彩られて見えるらしい。

狭い路地の角を折れた先に、喫煙所があった。

やっとの事で尿意を抑え、中に入ると、街のざわめきが仕切り一枚隔ててうつつすらと聞こえてくる。

今ここにいるのは、結一人だけだった。

結は仕切りに体を預け、指に挟んだ煙草を口へと持つていく。紫煙と表現する事がよくあるが、離れた場所にあるピンクのネオンが、煙の色を変えて見せていた。

外で飲む時に限って紙巻き煙草を吸うのが、結の習慣になっていた。

ニコチンには膀胱を収縮させる働きがあるため、我慢中に喫煙するのはマゾ的な悦楽があるのだ。

切迫感が来ているタイミングで煙を吸い込むと、酸欠状態によるふらつきと、おちびりがセットでやってくる。

これが、どうにか頑張ってしまいたいそうなくらいに気持ちいい。

それに加え、アルコール摂取による筋肉の弛緩、そして寒さによる感覚の麻痺が、結の気持ちを揺さぶってくる。

出口を締められているか、自信が持てない。下着が温かくなった時に、少しだけ失敗した事が確認できる。

少し飲み過ぎたかも。体の芯が揺らいでいる気がする。

それに。

おしつこ……。そろそろだろうか。

「ふう」

アルコールの火照りと夜風の冷たさが混じり合って、どこか虚ろで艶っぽい溜息だったかもしれない。限界が近づいていた下腹部、膀胱の……疼き。私は抵抗することをやめ、ただ素直になることを選んだ。いつものように。

「は、うっ……♡」

煙草の煙と共に、溜息が夜気に溶け出す。それと同時に、スカートの中で、水門を静かに開いていく。

「出す、よ……♡」

シヨロツ、シヨオオオオ……♡♡♡

ピチャピチャ……ピチャチャチャ♡♡♡

おしつこの熱い流れが、腿を伝い落ち、冷えたコンクリートに音を立てて打ちつけられていく。

水音が静かな空間に響くが、私はそれを隠そうという気は全然なかった。人がいる訳でなし。第一、どうやって隠せいいのか。

トイレで済ます時と何ら変わらない、おしっここの勢い。

この勢いこそが、積極性を意味している。

失禁する時のようなためらう心を、流れを、結は持ち合わせてはいなかった。

足元に広がる薄黄色の水たまりが波紋を描き、街灯の光を反射してキラキラと揺らめく。

この開放感……。

煙草を片手に、ただ排泄するという動物的な行為に耽る、背徳的なひと時。

煙草の煙とは違った、ふんわりとした湯気が立ち上り、それが体液である事を如実に物語っている。

「またしちゃったね、おしっこ……♡いけないんだ♡」

全てを出し切った私は、しばらくボーッと放心の体だった……。

結はひんやりしてきた下着を感じ、ブルッと震えて我に返った。

そして短くなった煙草を灰皿に押しつけ、濡れたコートと脚を

そのままに、夜空を見上げて余韻に浸った。

気持ち良さのあまり、ほんの僅かによだれが口元から垂れていた。着衣のままおしっこしたことより恥ずかしいと結は思った。

天気予報によると、明け方には雨が降るらしい。悪い子のやらかした痕跡は、程なくして消え去るのだろう。



「おお結さん。おかえりなさい」

「へへ……ただいまマスター」

グデングデンの酔っ払い口調で、結はマスターに応えた。

ぐじゅぐじゅの下着だけでなく、コートまでおしっこで汚れているのに気付いたのは、明るい店内に入ってからだった。

「その様子だと、スッキリできたみたいですね」

薄く微笑みながら、マスターは言った。

さっきまで、いやこれまで、自覚のないおしっこ我慢仕事に氣付かれていたのか。

それとも。

おしっこをした後に漂う、独特なマーケティング臭が鼻に届いたからか。

以前から、マスターには結の悪戯はお見通しだったようだ。

結の瞳が揺れる。

「お陰様で……」

こういう時、取り繕うように髪を撫でつけてしまう癖までバレているのだろうか。

「おや、コートが濡れていますね。今おしぼりを準備しますから、それで拭いてきてください」

マスターは、どうして濡れたかなんて訊かない。ただ、結のやらかした事を冷静に受け止め、対処している。

「お心遣い、感謝します」

「スッキリついでに、もう一つの欲求も、宥めてこられては」

「……？ やだ。マスターったら何を——♡」

マスターには、結がむらむらしている事まで筒抜けになってい
たみたいだ。

「分かりますよ、さすがに。僕も同じ性癖を持っていますからね」
「流石に、これは恥ずかしいですね……♡すみません、お店だとい
うのに♡」

「僕もご一緒して遊びたい気分なんです、そろそろ閉店ですし、
作業が残っていますので」

気付いたら、客は結だけになっていた。

寡黙なマスターが妙に喋っていると思えば、聞き耳を立てる客
が、もういなかったのだ。結は、マスターの告白のタイミングに
納得がいった。

「それじゃ、お言葉に甘えて……。お手洗い、お借りしますね♡」

「はい。いつてらっしゃい」

トイレは小洒落たバーに合っている雰囲気の間所だった。気持
ちよく、排泄欲を解消できる場所だ。

きつと、むらむらも、綺麗さっぱり満たせるはず。

結は最初、おしぼりを使ってコートを綺麗にしようと思ったが、
性欲の高まりが我慢できないレベルにまで達していた。

身だしなみを整えるのは後回しにして、まずはおまんこの疼き
を慰めないと、と思った♡

洋式トイレに腰を下ろし、まずは下着の上からクリ勃起を探り

出す。

「あっ……♡」

あそこはもうグッチョグチョ♡まんこグッチョグチョ♡下着
から指を離すと白濁した糸を引くくらい♡

もうたまんない♡今の声♡聞こえちゃってたかもしれないけ
ど、我慢なんて無理♡

チョンチョン♡ズーリズーリ♡カリカリカリカリ♡♡

十分におしつこと愛液とで濡れたおまんこ♡摩擦係数低過
ぎ♡♡

「おっ♡……んほお……♡♡ はあ♡ おまんこきもち♡♡」

ゆっくりと芯を撫で回すようにいじめたかったのに♡性急な欲
は、それを許してくれそうもない♡♡

もっと♡もっと♡とせがむように……♡腰がカクついて止まら
ない♡♡

右手で刺激していたのを、今度は左手に選交代♡クリに中指
と薬指を添え、指先をシュッシュと動かしてシコる♡♡

すう♡♡はあ♡♡♡

「はあ♡おしっこくっさ♡ たまんない♡♡」

さっきのおしっこ、ちよっとお酒くさい♡下着に付着していた
黄ばみが液状に戻って♡きつめの匂い♡♡♡

「おおっ♡この匂いっ、ん♡マンズリはかどる……♡ぎばぢ
い……♡フゴッ♡ふーっ！♡ふーっ！♡」

やばい……♡夢中になって……♡♡オホ声張りあげて喚ぎオナ

キめちゃってたけど♡もう、マスター許可済みマンズリだから♡万事OK♡♡

グポッ♡グポッ♡

おお♡Gスポやっぺ♡ザラザラを指曲げてトントン♡

なんかあ♡おしっこまたしたくなる♡

マスターに聞こえまくっているんだろ♡♡あまりにもド変

態♡……もっ♡……聞いて欲しい♡

願わくはマスターも♡勃起ちんぽイライラして欲しい♡♡

「んおほ♡私はクリちんぽおしこしこする♡……あ♡まんこきゅ♡♡おもらしパンツでぐしょ濡れまんこ♡おかしくなりそう♡♡」

ドア一枚の向こう側♡マスターもちんぽシコシコ♡♡していて欲しい♡……♡年上として平静を装っていたようけど♡マンズリこいて隙見せまくってたら♡自分のおちんちんも♡♡きもちくならないでしょ♡♡♡

「あっ、くるくる♡出そお♡おしっこまたでる♡……!!♡♡」

ジョバ♡プシャアアアアアアア!!♡♡

おまんこグッチョリかき回しながら漏らしてる♡全然便器に収まらないでまき散らしてる♡♡もうびっしょり♡♡♡

マスター性癖だっ♡♡言っ♡♡た♡♡この後二人でお片付け♡♡なん

て♡♡

「イク♡イグ♡イグー♡♡♡」

おまんこかき混ぜながら、すり切れるくらいにクリ摩擦で♡

超♡超イク♡♡さっきのお漏らし気持ちよかった♡♡思い出しイキ♡♡キめる♡♡

「おおお♡♡マンズリとまんね♡んほっ……おイク♡またイク♡♡イグ♡♡イグュー♡♡♡」

もっ♡もっ♡もっ♡♡♡超絶にきもち♡♡♡♡

……あれ♡♡もうすぐ閉店だっ♡♡言っ♡♡たっ♡♡け♡♡

「……マスター♡♡♡」

「気がお済みですか？」

ドア越しの結の問いかけに、誠実な、いつものマスターの声が返ってきた。うんざりといった調子かと心配したが、どうやら思い過ぎのようだった。

「かなり……すっきりしました♡でも……♡」

「どうかされたのですか？」

「ちょっと個室を汚してしまって」

マスターの性癖だと言われてから、結は甘えっぱなしだなという気がして、少し反省していた。

「それでしたら僕がなんとかしておきます」

「そんな♡悪いですよ、恥ずかしいです♡♡」

「お客様に掃除なんてさせられないですよ。そういう現場を綺麗にするのも、中々悪くない時間にも思えて」

優しい申し出だし、マスターが自分で掃除したいんだっ♡♡たらお願ひしてもいいのかも。結はそう結論づけた。

結は、何度もマスターに謝った。夢中になって自慰行為の虜になつていた自分がかなり照れくさかつた。

恥ずかしさは、不思議となかつた。公然わいせつを重ねる癖の人間の心理に、近いものがあるのかもしれない。

帰宅したら、着の身着のままでこたつに入り、思い出しオナニーをしたら、眠りに就こうと思つた。

◆続きは製品版でお楽しみください！

隣室に季節外れの打ち水お姉さんが越してきた話

冬のとある日。なんと言うべき点もない、ちょっとしたニュース程度の出来事があった。

《ピンポーン》

インターホンの音が鳴った。カメラで見ると、見たことの無い女性が立っていた。

「はい……？」

「あの、すみません。隣に越して来た者です。一言ご挨拶をと思ひまして」

怪しげな勧誘が何かかと思ひ、訝しむような口ぶりだった事をすぐに後悔する私。

よく見ると、すっきりとした清潔感のある服装で、好感が持てる第一印象だ。

カメラの前でしかないのに、彼女は上品にお辞儀をしたままだったので、相手に申し訳なく思ひ、私は早く応対に出ないといけないと思えた。

「あつ、そうなんですな！ 今ドアを開けますから、しばらくお

待ちください！」

「はい、お手数をおかけします」

私は急いでサンダルをひっかけ、玄関ドアを開けた。

「初めまして。すみません私ったら、見知らないお顔だと思ひ、つい警戒してしまつて……」

「いえいえ、女性用マンションと言ひても、それくらい注意するのが当たり前だと思ひますよ」

「はあ、ごめんなさい、あの」

「改めて、お初にお目にかかります。隣の七〇五号室に越してきました、西条と申します。引越作業でしばらくお騒がせするかも知れませんが、よろしくお願ひいたします」

西条。高校時代の思ひ出が頭をよぎつたが、顔の作りが違ひ。私は今、二十三歳。先輩は二十五歳になつてゐるはず。今、目の前にゐる西条さんは、もう二、三歳くらい、年上に見えた。

「は、はい。私は椎名と申します。こちらこそ、不束者ですが、よ、よろしくお願ひいたします……」

菓子折りを持ひて挨拶に来てくれたのを覚えてゐる。その時、第二印象が美味しなお菓子屋さんを知つてゐる綺麗なお姉さん、に変わった。

西条さんの大人びた物腰は、頼りになりそうなしつかり者、というイメージを抱いた。私には姉はゐないが「こういうお姉ちゃんがいたら良かったな」と思ひせる雰囲気だと思ひた。

あの日、SNSで追つてゐた人が、彼女、西条さんであること

を特定してまっしてから、その印象は音をたてて崩れ落ちた。



SNSでチェックしていたアカウントは、いつも淫靡な妄想や自慰報告などを垂れ流すという運用をしていた。

例えば、

「今日もクリ吸引グッズで充電切れちゃうまで無限イキしちゃったあ♡ちんぽ二本をシコシコしながらジュボジュボ啜えて空いてる片手でオナニーしてるのを妄想しながら♡えっち過ぎて、全くとちや止める気にならなかった♡♡夢中になって感じてるうちに頭真っ白になっちゃって……お汁でグチョグチョのお池の真ん中で失神してみたい♡♡♡」

とか、

「今日は人通りの少ない公園の、奥まった所にひっそりと設置されてるベンチでM字開脚オナニーキめちゃった……という妄想オナニーした♡妄想でごめん♡何回もイクイクしてるうちに、何か出そうになって、でも気持ちよすぎて指動かすのを止めようなんて考えは全然頭になかった♡しまいにブシュブシュ下品な音立てて潮だかおしっこだから分からない液体が吹き出しちゃって♡おほ声も我慢できなかった♡♡」

というような、男性のフォロワーを意識しまくった、淫らでどスケベな投稿がメイン。煽情的な投稿に乗せられて、自慰行為に

至ってしまうことも、何度かあった。

それに加えて、見ていたアカウントは、「すぐ消す」と言って、たまにエッチな動画を投稿していた。私はそのレアなイベントを見たくて、彼女のアカウントを自分が作った閲覧専用の、秘密のアカウントからフォローしていた。

彼女の動画投稿は、本当にすぐ消されるから、私は見逃したくなくて、投稿された時にスマホに通知が来るように設定していた。動画の内容は、おまんこにグッズを入れたり、クリトリスを執拗に責めたりして絶頂に達するという、よくある裏アカウントの投稿のようなものが主だった。

それらの中に、たまたま、思わず「きたーッ!!♡」と叫びそうになる類の投稿があった。それはおしっこ関係の動画だった。計量カップを床に置いて、おまんこをクパアしておしっこをそこに出し、薄黄色の液体でカップが満たされていく動画。

下着を穿いたままで出口を緩め、おしっこで下着が濡れていき、やがて滴り落ちる様子が克明に記録された動画。

すぐ消す、と言っても、そのアカウント主の彼女のスマホの中には、消されずに動画が残っているかもしれない。そう考えるとムラムラして仕方がなかったし、自分にもおしっこ趣味があったから、親近感が湧いていた。



真夜中に目が覚めた時。

枕元に置いていたスマホで時間を確認すると、午前二時を十分ほど回っていた。

ちよつと尿意がある。寒くなってから、トイレに行きたくて目が覚める事が多くなつた気がする。

こんな夜更けだし、やつちやおうかな？

誰も起きていない、自分だけの時間。その時間にするおしっこには、ただの排泄にはない価値を求めがちな私だった。

昨夜「すぐ消す」と、例のアカウントから投稿された動画からも、影響を受けているのだと思う。

動画の内容は、フローリングにワイングラスを立てて、そこに放尿をするというものだった。グラスはすぐにおしっこで満たされ、まるでシャンパンタワーの頂点のグラスのように、薄黄金色の液体が溢れ出し、床にゆつくりと広がっていった。

ワイングラスの中身はちょうど良い色合いで、何も言わずに飲めと言われたら、シャンパンと信じて疑わなかっただろう。

計量カップにおしっこをする時は溢れないものが、小さなグラスだと簡単におしっこで満たされていく事は、アカウント主の彼女にも分かっていたはずだ。

最初から床をおしっこで汚してしまう事を確信して放尿したと考えると、自分もやりたいという気持ち湧き、身体がほんのりと熱くなってしまう。

私には壁の薄いアパートに住んでいた時期の癖で、自宅では物

音を極力立てないように行動する癖が身についていた。私はそろそろと寢床を抜け出した。深夜に目が覚めた時も、できる事なら照明を落としたままで動きたいと思っていた。

煙草も吸いたくなくなって、喫煙具を持ってベランダに出た。煙草の煙については健康を害するおそれがあるし、臭いが出てしまうと近所迷惑になるので、寝静まった頃に限り、ベランダに出て加熱式の喫煙具を使っていた。

その時。

ガラガラという、引き戸を開ける音がお隣から聞こえてきて、私はビクッと震えた。

驚いた……。こんな夜遅くに、西条さんはどうしたのだろう。

私はしばらく気配を消して、隣の動向に耳を立てていた。

すると、スルスルという衣擦れの音が聞こえ、次いで「ピコン」という電子音。どうやら、西条さんのスマホは私の持っているスマホと同じOSを搭載しているらしい。だから、彼女が動画の撮影を始めたことが分かった。

星空でも撮るつもりなのだろうか。いや、さっきの衣擦れの音は、何かを脱ぐ時のような感じだった気がする。

シャアアアア……♡

一呼吸置いて、耳慣れた音が聞こえ始めた。

塞がった柔らかい何かを押し広げるような、魅惑的な響きを含んだ音色と、嗅いだらすぐそれと分かる香ばしい匂い……。この匂いは、コーヒーを飲んだ時独特の風香だった。

シューイイイ……♡

西条さんはおしっこをしているんだ……♡

三〇秒ほどその放尿音は聞こえ続けた♡

ジュツ……シューツ……♡

どうやらお腹の中身を全部出し終えたようだ。

ふう……という、ため息まで聞こえてきた。

私は動揺から固まってしまっていて、その方向を見てはいなかった。息も忘れていたようで、気付かれないように深呼吸した。

音の聞こえてきた方に顔を向けると、パーティションの隙間から、ふんわりとした乳白色の湯気が漂ってくるのが分かった。

そのあと例のアカウントが「すぐ消す」という決まり文句と共にSNSに投稿した動画は、自撮り放尿だった。

どこか、床の作りに見覚えがあると思っていたが、その時は他人の空似のようなものだと思い、深くは考えていなかった。

夜明け前頃に、私は再び煙草を吸いにペランダに出た。半分寝ぼけていたせいか、煙草を落としてしまった。それを拾おうとして、床に目を落とした時に、やつとピンときた。

「さっき見た動画、うちのマンションで撮ったものじゃないの……」



翌朝。

今日はゴミ出しの日。

仕事は休みだったから、布団にくるまってウダウダしていたかったけれど、収集の間隔が空く不燃ごみは、忘れずに出さないといけない。

昨夜の事が頭から離れず、早起きしてしまった私は、おしっこもしたいと思った。

一日で一番冷える時間帯だったからブルツとしてしまう。先にトイレを済ませてくればよかった。私は早くゴミを捨てて、部屋に戻ろうと決めた。

その時、エントランスから出てくる西条さんの姿を認めた。

「おはようございます、椎名さん」

「あ、西条さん。おはようございます」

気さくな感じで挨拶され、私も礼を返した。まさかのまさかだったけど、西条さんが、あのアカウントの持ち主だったとは。

「最近本当に冷えますね、トイレが近くて困っちゃいます」

「そうですね、本当に、おしっこ……すぐにしたくなっちゃいますよね」

私はゆつくりと、普通は使わない言い回しをして、上目遣いに西条さんを見た。

「？」

ダメか。期待していた、特筆すべき反応は見られない。西条さんは顔色一つ変えず、絵になる角度に首を傾げただけだった。

「あ、いや、え、えっと。トイレに行きたいなと思って」

私はあわてて取り繕った。あのアカウントの主は西条さんに違いない。決定的な証拠は揃っているのに、弱気な性分が出てしまふ。

「ごめんなさい、私ったら気づかず話してしまつて」

「いいんです、まだ大丈夫ですから……。あ、そういえば私、最近気になっているSNSのアカウントがあるんですよ」

言えた。

ちよつと強引な話の持つて行き方だったけど。

「そうですか。私も暇つぶしやニュースを見るのに使いますよ、SNS。椎名さんがおっしゃるなら私も気になってきました」

私はこの機を逃すまいと、スウェットのポケットに入れていたスマホを取り出して。例のアカウントを表示し、西条さんに見えるように画面を向けた。

一瞬「おや」という顔をした西条さん。

すぐ居住まいを正しお姉さん然とした態度に戻る。

「ご覧になった、いや違いますねきつと。ご覧になっていたんですね。困ったな、ふふ。お隣さんに見られていたなんて」

「こ、これを知ったからと言って、脅しとかそういうことに使つたりするつもりは全くないんです！」

「でも、いやらしい女だと思つたでしょ」

「いやらしいなんて、そんなこと全然」

爆弾を投げつけたのは自分なのに、西条さんの落ち着いた対応とは対照的に、しどろもどろだった。

「事実、こんな投稿を垂れ流して、反応を楽しんでいるんです。これをいやらしいと言わずに何て表現すればいいのか、椎名さんも困っているでしょう？」

「困っているなんて、考えていないですっ。私も、いや失礼しました、私はいい、いやらしいとか責めてる訳じゃなくって——」

「楽しんでいる？」

「……！」

西条さんは、私の言葉に被せるように、核心をついてきた。どう返せばいいのか、咄嗟には思いつかなかった。西条さんは目を細めて、私の言葉を待つているように見えた。

「なんて言えればいいのか、その……お世話、に……なっています」

「お世話……？ 私達まだ知り合つて間もないですよ？ って、

ああ、そういう意味で、ですか♡」

「はい……♡」

「いえいえ、つまらないのですが」

「つまらないだなんて、そんなこと」

「こんな私なんかでよかったら♡どうぞお使いください♡」

薄く口角を上げた西条さんの態度が、とても艶のあるものに見えてくる。まるで吸い寄せられそうな、魔性の微笑みに。

「いつも美味しいおかずを提供していただいて、本当に捗ってます♡あ、そういえば、こんなのも投稿されていますよね？」

保存しておいた動画を西条さんに見せる。ちらりと彼女を見ると、流石に羞恥心を刺激されたのか、頬がほんのりと赤らんで

いるように見えた♡

『すぐ消す』って書いて、本当に数分で投稿を削除しているのに……。いやあー、参りました♡」

西条さんは相好を崩し、はにかんでいる様子だった。語尾が、それまでの歳上のお姉さんというイメージから、花のような乙女の照れ隠しのような言い方に変化していた。

「興奮します♡実はベランダでおしっこ、私もしてるんです♡」
私にも、同じ性癖がある事を明かす。

「なんだ、そうだったんですね♡ちよっと、本当にちよっとだけなんですが……」

「？」

「ベランダに出た時、おしっこの匂いが薄くしたものですから」

「本当ですか？ バレないように細心の注意を払っていたのに」

「どこかの家で飼っているペットの匂いかな、と思っていたんですけど」

西条さんは、そう言うときスリと笑った。今度は私が顔をほおづきのように赤くしてしまう番だった。

私も西条さんも、性癖で意気投合するというたぐいまれな体験をし、精神が高揚しているようだった。そのまま流れで女子会をしようという事になった。



西条さんお勧めのカフェでモーニングをとって、私達は声をひそめて話をした。

性癖を披瀝し合う場で二人は盛り上がった。

背徳的な妄想についても語り合った。

最近、飲食店での非常識な行為がネットで拡散されるなど、非道徳的な行為は厳しく咎められる世の中。

人間として守るべき道徳や規範、社会のルールや常識に反している事は、おしそれとは出来ない空気があった。

普通の世界で生きている人には、絶対にバレてはいけない。でもない人には明かせない願望についても話が及んだ。

「居酒屋とかにあるじゃないですか、男女共用のトイレ」

「ああ、ありますね。あまり使いたくないタイプのトイレだと思いますけど」

「中には、洋式トイレと男子用の小便器が二つ並んでいるトイレもあるんですよ」

「あ、私は実際にこの目で確認したことはないんですが、ネットで見ただけではありません」

「鍵かけられる男女共用のトイレで、中には洋式トイレのある個室と、小便器、二つがあるといった」

「……ああ♡」

「ね♡」

「西条さん、思いつきがエロいです♡」

「あんなアカウントをやっているもので♡」

西条さんの魅惑的なウイंक。悩殺されてしまいそう。

「言われてみれば、そうですね……♡」

中に入るためのドアには鍵がついていて、内部には洋式便所と壁掛け式の男子用の小便器、それに洗面台がある。そんなトイレは存在しているようだ。

このレイアウトは、一般的な男性用トイレとは異なっていて、その空間全体が「一つの鍵付き個室」として機能する。

小便器でおしっこしてみたい。共用トイレなら、それも実現可能だろう。

私は性癖の囁きの虜になっていた。

「ちょっと待ってくださいね」

私はスマホを操作し、チャットで尋ねてみる。

《洋式と小便器が一緒にある鍵付き個室》は、特に小規模な居酒屋やバーなどで、男女兼用トイレとして採用される例が稀にある》

という回答が返ってきた。

「ね、椎名さん。あるって答えだったでしょ？」

「そうですね、場所は知らないんですけどね……」

「私、知ってるんですよ。こぢんまりとした場所なんです」

「そ、そうなんです……」

私は思わず身を乗り出した。興味津々だった。

「がやがやとした所なんですけどね」

「そうなんです。妖しい話も目立たなさそうです」

「木を隠すなら——」

「森の中、みたいな♡」

「バーの入っているテナントから出て、独立した共同の設備として、トイレがあるというスポットがあるんです♡」

「本当に実在しているんですね、なんか……いやらしい♡」

「そこで順番に立ちションしてみませんか？♡♡」

にわかに顔を近づけてきて、ウィスパーボイスで西条さんがさやいてくる。

「面白そう♡……あ、ごめんなさい、つい興奮してしまっ」

ここがカフェである事を一瞬忘れ、声を上げてしまった♡慌てて小声になり、取り繕う♡

「興奮しているのは私も一緒ですよ♡決行するのはいつにしようか♡」

「私でしたら、今週末の金曜日は空いています♡」

「奇遇♡私も空いているので、その日にしますか」

「そうですね、なんだか私、わくわくしてきちゃいました♡」

「私は前々から考えていて、実行できると考えたら♡」

「考えたら……？」

「少し、あそこが湿ってるかも……♡」

「いやだ♡西条さんたら♡」

「椎名さんだって、似たようなものでしょう？♡なんなら今触って確かめてもいいんですよ？♡」

「……濡れます♡」

こんなはつきりとした言葉で自分の状態を表現するなんて、完全に西条さんの世界に引きこまれてしまっている♡

「私と同じじゃないですか♡椎名さん♡オナ禁、できますか？ 決行する日まで♡今まで通り、ペランダでおしっこするのはいいですし、立ちシヨンの練習もしていいですよ♡放尿行為なら、なんでもOK♡」

「オナ禁、ですか♡ちよつと難しいかも、です……♡♡」

「難しいですか♡そうですね、私もムラムラがやばいです♡今♡トイレの話題の辺りから、こそこそ話は更に声を落として続けられた。ぶっちゃけ話の応酬、それも下ネタとなると、当たり前前の事ではある♡

「でも、なんとか頑張ってみます♡今日は火曜日ですから、今日含めて三日オナ禁か……」

「辛いですよね♡私は辛いですよ、とっても♡Xデーは、メに一緒にオナニーしません？♡」

「えっ、そんな♡やですよ♡」

「本当に？」

「う♡ほんと、ですよ……♡」

「いや、嘘ですね♡」

「うう……分かりました、やります♡いや、しましうね♡」

「腹を割ってお話ができた訳ですし、お互い親しく呼び合いたいものですね♡」

「喜んで。結ゆいつてよんでください」

「椎名結さん。当あたてている漢字を聞いてもいいですか？」

「結ぶ、と書いてゆいと読みます」

「ゆいって読み、好きなんですよね！ いいなあ、ゆいさん♡」

「えへへ、ありがとうございます♡」

「西条さんの下のお名前は、なんておっしゃるんですか？」

「私は静しず疏、静かに、おうへんに流れるの作りの側を組み合わせて、『疏』と書きます」

「なるほど、ちよつと待ってくださいね」西条さんはそう言いながらスマホで検索をはじめた。『疏』って、瑠璃を表しているんですね、静かなる青い宝石。ラピスラズリなんですね」

自分の名前なのに、今まで調べた事なかった。恥ずかしい思いで、ちよつと下を向いてしまった。

「宝石言葉は『神聖』とか『幸運』ってありますね。これから聖なる水でお清めするんだから、お似合いです♡」

「えっちな事の筈なのに、神聖って変ですかね？ あ、でも性行為を子をなす為の聖なる行為ですし、エッチでも神聖なんだ♡」

「そうですよ、だから聖水もエッチで神聖なんです」

「もう♡まあそういう話題に乗っかっちゃうと、その通りですけどね。お互い名前に肖なづかって、愉たのしみましょ」



「結さん、着きましたよ」

先日教えてもらったバーが、このようだった。でも、私には何があるか、分かりかねた。

「着きましたって、え？ ただの壁に見えるんですけど」

「そこにウェルカムボードがあるでしょう？」

「あー……これか」

言われてみれば、確かにそうだった。「今日のメニュー」とあり、つまみ料理がいくつか書かれていた。

「これ、目印になっているんです。そうじゃないと、ふふ、本当に通りすぎてしまいます」

「まさに隠れ家という感じですね」

「さあ、入りましょうか」

静疏さんが重そうなドアを開けると、外の雑音は一瞬で遮断され、この狭い空間で交わされる会話のざわめきに取って代わった。店内に漂うのは、ウイスキーの芳香。そこはまさに、洞穴のような場所だった。

客席は、カウンターののみ。背もたれのないハイスツールが六、七脚ほど、行儀良く並んでいる。

グラスを拭くマスターは、客の会話に静かに耳を傾けているようだった。

私と静疏さんは、しばらく色々な話題を楽しんでいた。

「欲求って不思議じゃないですか？」

「不思議というと？」

今、ちょっとした変化球を投げられたような。

静疏さんの言おうとしている事を測りかねて、私は彼女の問いに、問いで返した。

「欲求が満たされてしまうと、求める楽しみがなくなっちゃうというか……。だから『満たされているのに、なんか満たされない』みたいな、変な矛盾を孕んでいる気がしません？」

「静疏さん、変わった事を思いつくんですね。でも面白いです」
「膀胱の場合は……満たされてしまうと、排泄欲を満たすしかない。全部出した時に得られる気持ちよさは、次に繋がる」

静疏さんが声を落として囁く。

「性欲とは違うのは、排泄欲を満たす時の鮮やかな色彩を持った爽快な気分は、あまり色褪せない点、なのかもしれません」
私も静疏さんにしか聞こえないよう、小さな声で話した。

「そう。そう思うんですね」

二人が出来上がった時を見計らってか、静疏さんが耳打ちしてきた。

「そろそろ、決行しませんか……♡」

「はい……♡ もう漏れちゃいそうで♡」

本当に漏れそうだった。それと悟らせないように気をつけていたつもりだったが、果たして効果があったかどうか。私には自信がなかった。

「立ちションは勢いが大事ですから」

静疏さんは、私の明け透けな言葉にも肯定的だった。二人の秘密を共有しているという暖かさがこもっていた。

「お風呂で前に飛ばす練習、バッチリしてきましたから」

「私も♡」静疏さんは私の告白にも軽く同意し、「すみません、おあいそ、お願いします」と、店を出る事をマスターに告げた。

ドアを開け、バーの入っているテナントを出ると、急に尿意が勢いを増してきた。私は思わず立ち止まって、膝を折り合わせてしまう。

「結さん、もう準備万端じゃないですか♡」

「えへ……♡バーにいる時からやばかったんですよ♡」

「なんか必死で微笑ましかった♡」

「静疏さんにはみんなお見通しなんです♡ね♡んう、もうほんとヤバイです♡」

「結さんの体の持ち主じゃないけど、私も多分同じくらいにヤバイ♡その証拠に——」

静疏さんは、私の手を取った。

彼女の指は汗でじっとり湿っていた。我慢が限界だという証明だ。

いい歳した大人の女二人が揃いも揃っておしっこ漏れそう。そんな共感を持った尿欲が、危機感を煽りつつも、卑猥な気持ちに私を運び、膀胱の疼きが熱い火照りとなって広がっていく。

「あ、だめです……♡う……♡」

「結さん♡だいじょう……ぶ、じゃないみたいだね♡」

「少し、ちびっちゃい、ました……♡」

的確に私の状態を把握している静疏さん♡

私もきちんと正直に♡いやらしい口調で答えた♡♡

「おちびり報告、えっ……ち、すぎる、あつ私も♡」

私のはずかし報告で♡いけない場所での半連れション状態の静疏さん♡可愛すぎる♡♡

「静疏さんにも、感染っちゃいましたね♡」

「ねえ、提案なんだけど、結さん♡」

「なんですか？♡」

「酔って正体を失っている結さんを介抱している感じで……♡」

「はい♡」

「動けないまま漏らしちゃって……♡」

全部♡それと悟らせないように♡

「うう♡」

その実、故意に♡確信犯的な感じで♡

「私があればこれ世話を焼いているうちに……♡」

「あっ♡」

「分かる……？♡」

「静疏さんにも危機が訪れて♡」

二人仲良く♡♡

「うん……♡」

「そのまま為す術もなく♡」

「決壊させてしまう……♡♡♡」

本当は♡まだ我慢しようと思えばできる♡でもそんなのはいや♡♡って感じ♡♡

「やだ、静疏さんったら、本気で言ってます？♡」

「半分、いや半分以上は本気……ん♡」

「こんな所で♡でも余裕ない、です♡」

私はお酒の酔いでふらつきながら前を押さえ、おしっこ我慢を周囲にアピールし始めていた。チラチラと自分に当てられる視線が恥ずかしくてならない。

でも、精神を昂ぶらせるスパイスになっているのも事実で♡本当は見られたいのかも♡

「そっかあ♡本当に余裕なさげだね♡」

「あ、だめまた出ちゃいますう……っ♡」

シヨワツ……♡

湿かな湿り気を股間で感じ、身も心もふやけてしまいそう♡

下着だけでなく、内またの付け根まで濡れて♡つつ……と小さな流れがストッキングを伝う様が分かった♡分かつちゃう♡♡

「ほらあ、もう我慢できないんでしょう？ しちゃいなよ、お・も・ら・し♡最後までえ、ちゃんと見ててあげるからあ♡大人の結ちゃんなら、できまちゅよね？♡♡」

耳元で♡

静疏さんが「大人だからできるよね」と妖艶な微笑みと柔らかな口調で囁いてくる。

「はあん♡静疏さんのいじわるっ、もうマジで、で♡出ちゃう♡」

シユワア……♡

キツすぎる尿意♡留め切ることが出来ない細い流れが、徐々に川幅を広げていく♡

静疏さんの巧みな誘導に、身体が従おうとしている♡心と身体どちらが正しいの？♡

水門の隙間から、じりじりと溢れ始めてしまっ♡自分の意志では締められなくなっ♡てきている♡理性が生理的反応に押し流されそう♡

「よしよし♡結ちゃん♡」

「う……はあっ♡」

「ほおら、しーしー♡♡」

「はあ♡う……っ、ら、らめ！♡」

「いいんだよ？♡私がちゃんと♡みててあげるから♡♡♡」

ジョッ……！♡♡♡

ガスコンロにかけたやかんが吹きこぼれるように♡しゅわ♡っ♡♡

きつと今だったら湯気まで再現できそう♡♡

「も、もれちゃっ……♡ふああっ………！♡♡」

ジョバ♡

ジョオオオオ……♡♡

水分を限界まで吸い込んだストッキングを貫通し、ビチャビチャ

ヤと音を立てる、私のおしっこ♡

「頑張ったね、結ちゃん♡きもちーねー♡♡」

甘く甘く静疏さんが私のやらかしに寄り添ってくれる。それが
とてつもなく心地よい♡

「はあああ……♡♡♡」

「きもちー？♡」

シヨイイイイイ！♡♡

履いていたブーツの中にもおしっこが流れ込み、温もりで満た
されていく♡温かくて幸せ者です♡♡

「きもちい♡♡ぜんぶ♡ぜんぶでるうー♡♡」

太もももブーツもスカートも床も♡背中をさすってくれている
静疏さんまで巻き込んで♡もうめちやくちや♡♡

シヨイ、シヨオオ……シユッ♡

私は最後のおしっこを切り、ぶるりと震えた♡

「よしよし、しっかり出せたね♡結ちゃん♡♡」

静疏さんの私の背中に置かれた手は、私のおしっこの終わりを
正確に把握し、優しく頷いた♡

◆続きは製品版でお楽しみください！

ウォーキング・アサーション・ウィメン

今年の抱負は『椎名結は！ 痩せる!!』だった。

前々から常に思っていた、私の切なる願い。

今年こそはやり遂げる、そう意気込んでいた。端的な目標は達成しやすいと思っていた。

私は目標とする数値を決め、避けるべき食べものを決め、日常的にする運動も決めていた。

しかし。

《言うは易く行うは難し》

このことわざが、今年ほど身に沁みた年はないと思う。

「おや、結ちゃん、痩せたんじゃない？」

この台詞を、今年ほど待ち侘びたことはないだろう。

でも、そう言った声がけは、年の瀬も迫った今日まで、得られてはいない。

節度ある食生活が送れたかどうか。筋トレをきちんと日々こなすことができたか。

「これがまるで駄目だったよね……」

習慣付けに成功したのはウォーキングくらい。それでも前進なのだと自分を慰めたい所だけど、結果が付いてこないのは悔しい。

朝のすがすがしい空気の中を、リズムカルに歩く気持ち良さに目覚めたし、密やかな愉しみも得る事ができた。

朝一の尿意を抱えたまま、ウォーキングをするのが日課になったのは、いつ頃からだろうか。過去の記憶を手繰り寄せていくと、夏の日の出来事が思い出された。



太陽が早くのぼる季節だから、日の出の時間に合わせて目が覚めるのが常だったのに、その日はなかなか起きられなかった。結局、最後通告だと思って設定していたアラームで、眠い目を擦って起き出した。

比較対象が分からないからアレだけど、私は頻尿の割には熟睡できる質だと思っていた。

夜通し起きる事なく迎えた朝は、気分がよく、そして、下腹部がいつも以上に疼く。

おしっこしたいな。

朝の目覚めは尿意と共にある、それが普通だと思う。それを楽しむ事ができるのは、選ばれし人間だと思う。おしっこするのが面倒くさくてお布団でモゾモゾしている人は、続けているうちに目覚めちゃうかも？

川の堤防にある遊歩道が、いつも散歩をしているコースだ。見通しがいいから景色を楽しめるし、すれ違う人が多いので、モチ

べが高く保てると思ったからだ。

「おはようございます！」

「おはようございます！」

見知らぬ人と挨拶するのが、爽やかな朝にはお似合いだ。気持ちが上がって心地よく感じる。

それに加え、尿意を感じながら歩くのがテンションを高めにつ秘訣なんだろうと思う。

段々、下腹部で疼くおしっこ感覚が強くなってくる。

尿意、好き。

七時間越しのおしっこ、どんな色、どんな匂いなのかな。

おしっこが「おしっこしたいよ」と、膀胱の壁をジンジンと刺激してくる。

昂ぶってきているのが自分でも分かる。

私は折り返し地点にある橋を渡り終え、堤防から河川敷へと降りていった。

ちょうど架かっている橋の下、道路の真下の辺りにやってきた遠くで聞こえる鉄道の走行音や、橋の上を走っている車の音が聞こえる。人の生活の一部を垣間見ている気分。

人の気配をこうして感じながら、おしっこしたいというのがたまらない。

私は、最近のマーケティングポイントとしてお気に入りの場所にやってきた。

エロ本の集積所とでも言うべきか、沢山のヌードグラビアや、

素人投稿系、露出プレイや放尿プレイをしている本もあった。

自分もおかずとして使える思えるような過激なプレイの本を見ると、どうしてもムラムラしてきてしまう。条件反射で濡れる身体はある意味便利だけど……。尿意があるだけで濡れてしまうのに、エロ本はおまんこ中枢を的確に刺激してくるからいけない。

エロ本は散乱していて、小学生などが放課後に集まったりするのだろうかと思う。思い思いのページを見て、鼻息荒くしているのを妄想した。

「ちんぽ、シコったりもするのか……」

きつと、シコってるんだろな。白濁液ザーメン、いっぱいイクイクしている所を覗き見できたら楽しいのに……。

私は高校生時代、しばらくの間、西条先輩と付き合っていた。恋人ができたのは女の先輩が初めてだったから、自分はレズビアンなのかな、と思っていた。だけど、男性向けのエロ本見ても興奮できるし、ビアン寄りのバイなのかなあ。

異性の場合、立派なちんぽにも惹かれるものはあるけど、年下の方が好みかも。しよつとシヨタが入ってる自覚がある。

「あつ、やば。そろそろ本当におしっこしないと。我慢できなくなっちゃうし、会社の支度に関わなくなっちゃう」

私はパンツを下ろして太ももを開く。そしてクリトリスにぬるぬるをいっぱい付けて、擦りつける。

「どのページでアサーションしたらいいかなあ？」

アサーション♡

朝ションと似てるよね。

自分も相手も尊重しながら、自分の意見や気持ちを率直に、かつ適切に表現するおしっ娘^{おしっ}コミュニケーションスキル。というこじつけをして私は覚えてる。

クリシコしながら、ページを捲っていく。

ペットのリード線を首に付けられた女の子が、電柱に向かっておしっこしている写真があった。

「ありがちなシチュだけど、ありがちなのは、それだけ人気が衰えないという証拠なんだよね」

このページにおしっこ出しちゃおう。

開いたページにしつかりと癖をつけ、手を離しても見られるようにした。マージングする時には、両手を使うことが多い。

クリ擦りをしたまま、もう片方の手で、おまんこをクパアと開いていく。クリ擦りがおしっこの切迫感に、勢いをつけていく。

出す♡はあゝもうおしっこ漏れる……♡♡

しつかりと女の子の顔に狙いを定め、おしっこ出す♡

プシッ♡♡♡

プシ♡プシ♡プシ♡プシ♡プシ♡

朝起きてから、この場所まで大体三十分。毎朝、危ういくらいにおしっこしたいから、開放感が半端ない。目の前に脚にかかった下着があったから、クロッチを確認した。かなりの範囲がおしっこで変色しているのが分かる。いつの間にかおちびりを繰り返してみたい。

「ふう〜。この女の子の表情いいなあ。演技をしている感じがしないもん」

目が黒塗り修正で見えなくされているけど、だらしなく半開きになった口が、開放感と背徳感と服従心を表している気がして♡

シヨオオオオオオオオオオオオオオ〜♡♡♡

「ふう〜♡本当に好きでおしっこしてる感じが好感持てちゃう♡♡」

顔射が気持ちいいと知ったのは、エロ本におしっこをぶっかけるのが好きになってからだ。AVのセックスや輪姦シーンで、顔をベットベトにされている女の子。その陶然とした顔♡演技が上手い女優さんが、やっぱり好きになりやすい♡♡

シユウウツ♡シユツ♡シユウウウ♡♡♡

「ふう、全部でた。クリオナしながらエロ本におしっこマージングするのが癖だなんて、誰にも言えないね」

軽くイッたし、おしっこもすっきり出来たので、下着を上げる。後でシャワーを浴びるし、まんこ汁とおしっこでベッタベタのパンツの黄ばみを嗅ぐのが好きだから、おまんこをティッシュで拭うなんて事はしない。

◆続きは製品版でお楽しみください！

きちがいハロウィンおもらしセックス

「何も当日になって言わなくてもねえ……」

私は放置民になってしまった。

今日は久しぶりの友達と会ってわいわい騒ぐつもりだったのに。

曰く、

「結ゆい〜！ 彼氏がインフルになって動くのも大変そうだから、看病に行っている??」

との事だった。

自分から感染りに行くんかい！ 女の力で男を動かせるんかい！ お風呂にすぐご飯にするそれともわ・た・し？ でわたしを選ばないんかい!!

友達からのドタキャン連絡があって、最初は凹んでいた。話の始まりは友達からのお誘いだったというのに、この扱い、ひどくない??

自分だけの気楽さとマイペースで酔えること、そしてアルコールで火照った身体に宿る尿意の心地よい疼き。

私の感情は、尿意を処理するプロセスで、尖った感情をマイルドにするお薬を分泌する作用があるから……♡

まあ、楽しめるようになった辺りから、今日は一人飲みの気分

だったという事に気づいたんだけどね。

ちよつと調子に乗ってしまったというのはある……。

「ああー、また飲み過ぎたあ」

ひとり飲み続け、泥酔一歩手前で辛うじて踏みとどまった私。本当に踏みとどまっているかは客観的視点じゃないと分からないと思いつつ……。

本日は、足元もおぼつかない中、ご来席の皆さん、乾杯！

じゃなくって。

泥酔一歩手前じゃないのかも。思っている事がそのまま口をついて出てしまいそう。

危ない。

独り言になってしまったのか、心の中で叫んだだけなのかさえ怪しくなってきた。

それにしても、だ。

「おしっこ、したいなあ……♡」

自分の頭の中に渦巻きつつある感覚を、外では通常使わないストリートな言葉で表現してみる。口の中でつぶやくように。悪戯っぽく♡

言い終わってから、キョロキョロと周りを見てしまう小心者。それなら言わなきゃいいのに♡

おしっこしたい♡この言葉には、尿意に魅了されてしまった人間を蕩けさせる力が秘められてる♡

辛い事に、誰も近くにはいないようだった。変質者なのに変

質者扱いされないって、なんとなく不満♡

線路沿いのフェンスに寄りかかり、行き来する電車の列を見るときもなしに眺めていた。尿意をすっきりするのも億劫だ♡

手癖で、煙草とジッポを取り出す。

路上喫煙はいけない事だと分かっているけど、口寂しいものは仕方ないし、路上放尿もいけない事だとは分かっているけれど、身につけてしまった習慣はすぐに変えられるものではない♡ましてや、それが自分の性癖となつてしまった今となつては♡

「おしっ……♡面倒だなあ♡♡」

面倒なのは、正規の手順を踏んで尿を排出する事であつて、欲求に忠実になるのは全然構わない♡このまま垂れ流してしまおうか、などと考えていて、だんだん楽しくなつてきた♡

おしっこという単語で脳内が占められつつある中で、わくわく感が否が応でも増してくるのが分かる♡

「でもなあ、このコート高かったんだよね♡」

ミリタリーな感じのコートで、左右の肩から前に垂れ下がるパツチを配したデザイン。一目惚れしてポチッた逸品。

「股を肩幅くらいまで開いて下着のままで出せば、一本の水流になつて、真下に落ちてくれるかな♡♡」

着衣でのおしっこは経験豊富だし、自撮り目的で姿見の前でした事もある♡裾は短く、太ももが露出したデザインだから、おそらくは大丈夫。履いているブーツに流れ込むという事故も起きなさうだ♡

第一このコート、既に被害者リスト入りしてるしね♡

考えていると、だんだん、おしっこの引っ込みが付かなくなつてくる♡

でもまだ♡まだ早い♡

煙草を口にし、胸腔にニコチンをしみわたらせる。美味しい♡寒い日は、はっぱの燃焼温度が下がって煙草の味が良くなると聞いたけど、本当かも♡

強くなつてきた尿意に加え、喫煙によるヤニクラ状態が起こり、相乗効果でたまらなくなつてしまう♡♡

「はあ♡もうこのまま出しちゃおうかな♡♡」

しばらく夜風に当たっていたからか、身体は冷えてきていた♡なんていうか、発射寸前、みたいな♡

短いスカートだったから、特に下半身に寒風が効いていた♡酔っている事もあつて、出口を締めているのかどうかという感覚も、曖昧になりつつある♡♡

というか、独り言ばかり気持ち悪いから辞めた方が良いつて、さつきまで思っていたというのに♡今日は気分が良すぎてだめ♡

「ねえ♡もしかして暇してるの?♡」

唐突に話しかけられ、私の肩が勝手に踊つた♡♡いつのまにか太ももを合わせ♡コート越しに前を押さえて前傾姿勢になつていた私♡

恥ずかしさを誤魔化すように、物憂げな感じでゆっくりと顔を上げた♡そして、声の主の方に体を向けた♡

歳下に見える男の子だった♡私は二十三歳だけど、十九歳、くらい？♡♡

複数回ブリーチをかけて金色に染めたような髪色に、耳たぶには太いピアスを入れている。『チャライ』が服を着て歩いているような子だ。

顔面は悪くないと思った。点数を付けると八〇点、いや甘やかしたらだめ、七五点かな。

「？ ナンパなら間に合ってますけど」

なかなか好みかも♡と思った。だけど、シッシと追い払うように手をひらひらさせながら、興味ない風を装ってみた。

「ハッピーハロウィン！」

「アンハッピーハロウィン……何か用？」

冷えた夜の空気が、反射的に発した私の声で震えた。いや、震えているのは私か。突然、目の前で立ち止まったニット帽の彼の勢いに押され、つい言葉を返した。

そういえば、今日はハロウィンだったっけ。

ここ数年、警察が大勢動員され、警備が厳しくなっただけは、仮装してワッショイ熱病患いの狂乱は影を潜めた。

男の子はニヤリと歯を見せ、やけに爽やかに、さらりと生々しい言葉を吐いた。

「きちがいハロウィンセックスしようよ♡」

私はその言葉に驚きもせず、酩酊した思考のまま、逆に挑発するように肩をすくめた。

「……いいよ？♡ちようど濡れてるところだったし♡」

「え。二つ返事で♡てか濡れてるんだ♡」

こんどは彼が目丸くする番だった。丸い目をして、口まであんぐりと開いたままで硬直しているのが少し可笑しかった♡

「なーによ……♡悪い？♡♡」

「そんなに濡れているの？ 確かめてみていい？♡♡」

ストリートというか素直というか、好奇心に満ちた口調で彼は問いかけてくる♡

「くすっ♡♡」

私は苦笑いをしつつ、ゆっくりとした動作で彼を見上げた♡そして、彼の股間に目をやった♡

黒いスキニーパンツの生地が、彼の内にある欲望を窮屈そうに包み込んでいるみたい♡もはや内ならないじゃない♡♡

「その股間の硬いやつで確かめてみたら？♡」

内ならないのは私の尿意も一緒か、と思った♡

気付いた時には膝を擦り合わせ、その場で足踏みをしていたから♡いつ突っ込まれてもおかしくない仕草をしつつ、挑発的な言葉を投げかけている私♡

我ながら、おかしな女だ♡

濡れていると言ったのは本当……♡私は飲むと濡れがちな質だったし、アルコールの利尿作用に負け、少しおちびりもしていた

から♡♡それらが混じり合って、良い具合のぬるみがある状態だ
と思った♡

「それは風情も何もなくない？」

「いやいや、あなたのお誘いからして風情もなにも感じ取れ
なかつただけ？♡」

囁んだ。

男の子は喉奥でククと笑った。

「……なかつた♡ふふ♡かわいいね♡♡」

「うるさい！♡」

「あは♡」

「あはじゃないが♡」

「確かに突っ込まなくても思っ♡ところでき、僕お金持っ
なくてさ♡」

私はアルコールのせいで重たい視線を彼に投げ、心底呆れた溜
息をついてやった♡

「そういう事は最初っから言いなさいよ♡真っ先にさよならし
てたのに♡」

「うそ、ちゃんと持ってるよ♡」

「うそつかない。あー、私さつきからおしっこしたかつたんだよ
ね♡我慢してたけど……やば♡♡」

アルコールの力なのか、あるいは単なる気まぐれか♡普段はあ
まり口にしない『おしっこ』という言葉が、まるで砂糖菓子によ
うな甘さを伴って飛び出した♡

「……へ？ 今なんて？♡♡」

「だーかーらー。おしっこ♡おしっこしたかつたのー！♡♡」

男の子は眉をひそめ、それから戸惑いと面白さが混じった顔で
言った♡

「お姉さん、キス魔なら知ってるけど、おしっこ魔は出会った事
ないよ♡」

「一期一会、出会いは大切なものだよ♡」

「いいなと思っ♡てナンパしたお姉さんにおしっこしたいって言わ
れた話♡♡」

これまでの下りを一行にまとめただけ♡♡

「なにそれ、あはは♡ 小説家の野郎、ってか？ あははは！♡

くだらない、ふふ♡」

ジョワ……ッ♡♡

下着が温かくなり、なんだろう、とちよつと考えて、冷たくな
つていく時、おしっこをちびつた事に思い至つた♡♡

だめだ、面白すぎる♡

ジュウ……♡♡

また出てしまった♡♡

「おしっこしたい♡♡」と前もって言っ♡たから、正直に申告し
てもいい。そう思っ♡た♡

「くだらない話なのに、私は笑い上戸なの？ お腹に力が入りす
ぎて、少しおしっこ出たあ♡♡もう♡♡♡♡」

「いいなっ♡て思っ♡てナンパしたお姉さん♡」と言われて、尿意の

切迫感が増す♡もう、じっとしてられない♡私、嬉しいのか
もしれない♡嬉しよん前のあの感じだ♡♡

「え、漏らしちゃった？♡」

「ううん、ちびっただけ♡濡れてるって言ったけど、ちょっとサ
ラサラになっちゃったかも♡♡」

「触るね♡ねえ、その前にお姉さんの名前♡」

「ん♡」

「お姉さんの名前、聞いてもいいかな♡」

「結だよ♡君は？♡♡」

「亮司。亮って呼んでほしい、かな♡」

「じゃあ、亮くん♡確かめてみて♡♡」

私はそう言くと、尿意が辛かったけど、頑張って脚を開いた♡

そして、亮くんの手を取り、私の大切な場所へと導いた♡♡

おまんこは、色々な意味で既に大変な事になってる♡♡

「えっ……と♡失礼するね、結さん♡♡」

「ひやりとするかも……あっ♡♡」

下着越しでも、とても敏感になってるのが分かる……♡最初
は恐る恐るといった感じの触り方だったのが♡♡少しずつ大胆に
なってくるのがたまらない♡♡♡

「すごい、もうびっちょびちょ♡ほんとぐっちょぐちょ♡めっちゃ
濡れてるし♡♡」

「そんなの♡自分がつく知ってるよ♡んん……はあん、あ♡

そこだめっ……♡♡♡」

亮くんの指がクリトリスをピンポイントで探り当て、ヌルヌル
で潤滑性バツグンの私のおまんこを、優しく刺激してくる♡

「ねえ、結さん♡こどう？ きもちいい♡♡」

すりすりとおしっこ漏れそうなので、おかしくなっちゃいそ
う♡♡

「うん♡きもちいい♡あ、らめらめ♡ほんとらめっ♡♡おしっこ、
おしっこでちやうん♡♡」

シヨワッ♡ジュウウ……♡♡♡

「もう、結さんったら締めてられないの？ おしっこの出口♡♡」

「わっ♡だめだ♡もう、もう無理♡♡おしっこっ、おしっこ出
すね……♡♡♡」

シヨッ？♡♡

まだ♡♡こんなにきついのに許されないなんて♡♡♡

「だめだよ、結さん♡ハメハメするまで我慢♡」

優しく生理現象の禁止を言ってくる亮くん♡♡

イヤイヤをしながら私は懇願する♡♡

「そんな事いったって♡もう出始めちゃってるっていうのにい
っ♡耐えられない♡♡」

ジョ……♡♡

「じゃあさ♡あそこにある路地裏までは耐えられる？♡♡」

シヨロッ！♡♡

「路地裏で全部出す♡それでいいよね♡♡」

「子供みたいだね♡結さんったら♡」

ジョーイッ！♡

本当に無理だと言ってるっていうのに♡♡自分にしか分からないこの辛さ……♡はあん♡♡本当につらいよ……♡♡

「じゃあ♡路地裏に着くまで押さえてておまんこ♡♡くうっ♡♡♡きっ♡の♡助けて♡」

「こんな大通りでひと目があるのに♡♡結さんなと言ってるの♡」
亮くんは意地悪になる♡♡こんな所でお漏らし許してくれる人がいたら、それこそ頭おかしい♡変態なんだから♡ねっ♡♡♡

「おまんこ触りたかったんじやないの♡亮くん♡」

私は無理矢理亮くんの手を握って♡おまんこに押しつける♡♡そのままとっ♡を滴らせながら♡おまんこにびったりくっつた亮くんを感じて♡♡路地裏まで引きずっていった♡♡

「もう結さん♡♡通りかかりの女の子、ものすごい目つきで睨んでいたよ♡ほかに、何人もチラチラ♡♡」

「温もり感じないと♡ほんととかどうか分からないでしょ♡♡」

亮くんのおててにマージングしたいだけ♡♡自分に突っ込みを入れたくなる言い訳♡♡

亮くんはニッコリ笑っている♡天使／悪魔のような笑み♡♡

「じゃあ、あと十分♡我慢でき——」

あ……♡そんな無限に近い時間なんて耐えきれない♡♡

「むり♡むり♡むり♡……んっ♡♡ムリだよお♡♡」

亮くんの緩いテンポの口調に身体が悲鳴をあげる♡

電車の行き来を見ている時からおしっこしようかなって♡思うくらいにしたかったのに♡♡

割り込み処理が入っても……♡タイムアウト処理が走っちゃう♡♡

おしがまダンスを舞いながら♡

「あ♡出ちゃうしっ……♡あったかいでしょ♡私のおまんこ♡を意味してるか！♡♡分かってるくせに……♡♡」

泣きそう♡♡♡

「路地裏って言っても本通りから見えてるんだからそんなはしたない声出さないで♡恥ずかしい♡あはは♡♡」

「きちがいハロウィンセックス……♡♡しなくないの？♡」

「うーん……♡」

「私はしたいよ♡♡」

「そんなの、僕の股間見れば分かるでしょ♡ちゃんと見て♡♡」

見てまずけど♡視線感じさせないのすごく苦勞する♡♡バッキバッキぱいの分かる♡でもばかでっかいだけでフニヤチンかもしれないじゃん……♡♡

もう♡おしっこ余りにもしたくて腰クネ止まらないから♡亮くんの指使ってオナニーしてるようなもんだし♡♡おしっこ我慢の切なそうな吐息に隠れて♡喘ぎバレてないっはず♡頭変になりそお♡♡

「じゃあ目の前で見えて判別してよ♡」

そう言うとき亮くんはおまんこじゃない手を上げて♡私の頭に置

いた♡その手に少しだけ力がこもる♡

私は無言でそのエッチな庄と尿圧に屈して、膝を折った♡パ
ンツとズボンの二枚隔てて♡おちんちんがある♡♡

大通りから見ると私が亮くんのちんぽをしゃぶっているように
しかみえないと思うけど♡♡やば♡♡

ショワァァ♡♡

こんなのおしっこでちゃうでしょ♡♡亮くんの手がおしっこを
止めてた事に今更気付く♡

「そんな……♡くっついてなんて言っていない……♡♡」

動揺している亮くんなかなかかわい……♡♡本当は鼻先をち
んぽに擦りつけられて、思わずちん嗅ぎしているだけなのにね♡
条件反射って♡こわ……はあおしっこ……♡

スウ……♡ハァ……♡♡

ジュッ♡♡

「スンスン♡んあ出る♡しっこでりゅう……♡♡♡♡！♡♡」

もう♡おちびりなのかお漏らしなのか判別できなひ♡でも必死
に止めてるからこれはおちびり♡♡

「この人ちんちんの匂い嗅いで……♡♡」

本当の事は当事者以外には分からない事であるよね♡♡亮く
んのちんぽ、意外にいいかもっ、という事とかね♡♡

おまんこがひくついて止まらない♡ひくんでする度に少しずつ
でる♡♡♡

「くっさ♡はあ……くっさいなあ♡♡」

「う、うるさい♡」

「だあってえ♡亮くんったら、めっちゃおしっこくっせえんだも
ん♡♡おしっこくっさいよお……♡♡犯罪的かぐわしさしてる
よ？♡自覚あるー？♡♡♡♡」

我慢できなくなり、ズボンのジッパーを下ろす♡♡

ジョワァァァ……!!♡♡♡♡

嬉しよんが駄々漏れになってしまっ♡♡

「あつ☆♡♡すっ……♡」

「……？　す？」

「す、素晴らしい♡♡♡♡♡」

おまんこがひくひくして♡期待したちゃうのが分かる♡♡ほし
がっでもう♡おしっこもだけど愛液のトロトロがすごい♡

亮くんの下着はチャライ外見とは裏腹のブリーフうっ♡しかも
白だった♡♡私の性癖をよく理解している♡♡初めて会ったと
いうのに♡♡

朝から今になるまで何回おしっこしたのか、亀頭の納まってい
た場所に♡黄ばみが三つくらい♡広がっていた♡♡

勃起すると、下着に当たる亀頭の位置ずれるから♡♡♡♡♡

うーん♡えらい♡もうムリだ……♡♡♡♡

「ごめんね亮く……ん♡私もう我慢できてないよ？♡だっておし
っこ出てるもん……♡♡音聞いて……♡♡♡♡♡」

シューウウイイイイイイイイ……♡♡♡♡♡

「聞こえてる♡いいい出して♡♡」

「おっせえよ!!♡♡♡♡♡」

「ゴメン♡♡♡♡♡」

ジュゴゴゴオオッ、ジュオオオオオオッ、♡♡♡♡♡

音響かせて欲望吐き出しながら♡最高のエロ文句が考えるよりも先に口について出そう♡♡

「ねえ亮くん、亮くんのエロぱん♡嗅ぎ倒してもいい?♡♡おまんこが待ってくれないの♡♡♡」

「嗅ぐだけ??? 舐めてよ♡♡♡」

ショワワワァァ……♡♡♡

「だめ♡ 舐めたら折角の匂いが、私のよだれ味一〇〇パーセントになってしまうでしょ♡♡」

すう……♡♡♡

この匂いほんとすき♡♡

よだれの匂いも嫌いじゃないけど♡さすがに自分のじゃ抜けない♡♡……エッチだなとは思っけど、もっともってエッチなものがすぐそこにあるのに♡♡

亮くん、とても物欲しそうな目をしてこちらを見ている♡♡

「じゃあさ♡結さん嗅ぎオナでいけたら♡僕のも舐めてくれる?♡♡」

シュイ……ッ♡シュワッ♡♡

はぁ……長いながあいおしっこ全部♡♡ぜんぶでたあ♡♡

◆続きは製品版でお楽しみください!



奥付

閃光尿女サンプル

発行：2025 年 12 月 31 日

頒布イベント：コミックマーケット 107

著：kpc

Twitter：@nyanpoyoyo2

pixiv ID：63106856

Mail：nyanpoyoyo2@gmail.com

絵：kq

pixiv ID：99498133

印刷：ちふ古都製本工房